

主日礼拝 11月6日（日）

題 「神を待ち望み、日々を大切に」

テキスト：ペトロの手紙Ⅱ 3章8～18節

皆さん、おはようございます。

今年も11月を迎えました。神さまの憐みと平安をお祈りいたします。

さて、今日でペトロの手紙Ⅱの学びも最終です。ペトロの手紙ⅠとⅡからメッセージを受け取ることができて感謝しています。

3章1節にもありましたが、今日の個所にも「愛する人たち」という呼びかけの言葉が出て来ています。8節そして14節、17節にも「愛する人たち」とあります。離散して生活していたキリスト者、信徒たちへの著者の思いの深さを感じるのです。

ちなみにわたしが40年ほど前にドイツに研修に出かけた時、ドイツの伝統的な教会の礼拝の説教の時には、牧師は会衆に向かって「リーバー ゲマインデ！」という言葉で始まっていた事を思い出しました。その意味は、「愛する、教会に属するみなさん！」という意味です。これはドイツの教会の伝統なのかもしれません。

さて、今日の個所では、

「8:愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、

一日は千年のようで、千年は一日のようです。」とあります。この言葉は旧約聖書の詩編90編4節のことばの引用だと言われます。この言葉から、神さまの時を超えた広大な視野、まなざしを思わされます。

続いて、

「9:ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅

らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びない

で皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられる

のです。」とありますが、「遅いと考えているようですが、」という言葉は、

「終末の遅延」と言われ、初代教会の中で、深刻な問題となっていたのです。つまり、イエス・キリストの再臨を待っているのに、なかなか実現しないということで、不安になり、なかには苛立ち、やけになって道徳的に退廃していく人たちもいたようです。それに対する答えが、「8:愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」神の時と人間の時の受け止め方の違いです。確かに人間的にみれば、イエスさまが来られることが遅れているように見えたとしても、それは必ず実現するのだ、ということ。たとえ遅れているように見えたとしてもです。

そして人間から見て、主イエスの遅れている理由は「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」と説明されます。神さまの忍耐があげられています。

「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、」と。「悔い改める」とは、神に立ち帰ることです。放蕩息子の帰りをひたすら待った父親のように、讃美歌に「帰れや、我が家に」とあるように、神さまは、この世の荒波で疲れ果てた人々が自分の所に帰ってくるのを長く待っておられるのです。

また神の備えられた時は、「主の日」と言われます。

10:主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。

「主の日は盗人のようにやって来ます。」面白い表現だと思います。

「天は激しい音をたて」とは、「きしむ音、鳥の羽音」とも言われます。

「自然界の諸要素」とは、あらゆる物質、または天体にある太陽、月や星などのことで、「地とそこで造り出されたもの」とは、人間が作ったもの。

主の日は、静かにしずかに突然起こることです。日常生活の中でも、思ってもみなかったことが突然起こることもあります。

ここから、私はイエスさまが地上を生きられた時、愛する弟子たちに、度々「目をさましていなさい。」と教えられたことを思い出しました。

初代の信仰者たちの持っていた神さまに対する信仰は、希望の信仰です。それは、個人的なこと、自分自身だけのことではなく、被造物、世界と宇宙全体に関する事です。

「13:しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」と。預言の言葉のようです。

あたかも、今、世界の環境問題のことが大きな課題となっています。

「持続可能な開発」を意味する、SDGsの問題が緊急の課題だと言われています。人間の生き方によって、地中が滅びるという危険性があるからです。

聖書の語る福音は、単に個人だけの問題ではなく、人間を始め被造物、世界、自然、宇宙と関わる事柄であることを教えられます。わたしたちは、苦しみはあっても、あくまで希望があることを忘れないでいたいのです。**ユルゲン・モルトマン**というキリスト教倫理の神学者は、人類が地球に生きていることの意味を表す「**ガイア理論**」ということで、「ガイア」とは地球を含めた宇宙全体と思って良いと思います。著書「希望の倫理」という本の中で、「地球をただ単に人間の環境と見なすだけの現代の人間中心主義に対してひとつの代替案を

提供し、逆に、地球を基準にして人間を考えるように導く大切さ」を語っています。

聖書が神の天地創造を語る時、神の創られた時とガイアに生きる人間の生き方にまで迫ってくる問いかけを持っているのだと思われ、驚かされます。そうすると13節の言葉は、輝きを放つように思えるのです。

「13:しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」この言葉に初代教会の人々の、「マラナタ・主よ、来てください！」との生き生きとした霊的な受け止め方の息吹に触れる思いです。

14:だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい。

15:また、わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい。それは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、神から授かった知恵に基づいて、あなたがたに書き送ったことでもあります。

「忍耐深さを、」とは、「長い心、気長くあること」という単語が使われています。神さまは、気長く待っていてくださる方だということです。子どもの頃、我慢とは、歯を食いしばることと教えられましたが、それも必要な時もあるかもしれませんが、ここでの我慢は「自らの意思で身を低くしてそこにとどまっていること」と解説してくれる聖書学者もいます。良い解釈だと思うのです。これが神さまの愛、イエスの愛、そしてその愛を受けたわたしたち人間の愛となって表れるのです。わたしは自らの意思で身を低くして十字架に向かわれたイエスさまの姿を思わされました。わたしたちは、自分を小さくする時、イエスさまの苦しみと愛が分かってくるのです。そして、イエスさまと神さまの愛がどれほど大きなものであるかを知って行けるのです。

わたしたちは、創造主、愛なる神さまに創られた人間として、人々、自然の中、世界の中に生かされていることを思い返し、感謝し、愛の働きに励むことによって神さまに栄光を帰して行けるわたしたちであり、キリストにある群れであることを信じて、希望を持って日々を大切に生きて生きたと願います。

主の平安を祈ります。